

**[成果情報名] トマトすすかび病に対する効果の高い殺菌剤防除体系**

**[要約]** トマト栽培で多発生するすすかび病に対し、すすかび病菌の発生生態に基づく重要防除時期（定植直後から 10 月まで）に、予防効果の高い殺菌剤（TPN 水和剤、マンゼブ（F）水和剤）を散布する防除体系は、高い防除効果が得られる。

**[キーワード]** トマトすすかび病、重要防除時期、TPN 水和剤、マンゼブ（F）水和剤

**[担当]** 三重県農業研究所 農産物安全安心研究課

**[分類]** 普及

---

**[背景・ねらい]**

トマト栽培において、葉かび病抵抗性品種の普及に伴い、葉かび病の発生が減少した。しかし、葉かび病を対象とした殺菌剤散布が減少したことから、葉かび病に似た病徴を示すすすかび病が、栽培早期から多発生するようになり問題となっている。そこで、本病の重要防除時期ならびに防除効果の高い殺菌剤に基づき、効果の高い防除体系を確立する。

**[成果の内容・特徴]**

1. トマトすすかび病は、前作発病株率の高い圃場において、定植直後から発病株率が高まる（表 1）。このことから、伝染源はハウス内に残存しており、定植直後から感染ポテンシャルが高いため、定植直後が重要防除時期である。
2. トマトすすかび病は、28℃で発病と伝染が盛期となり、33℃以上では伝染力が弱まり、20℃以下では発病が緩慢である（表 2）。このことから、定植から 10 月までが、発病と伝染に好適な条件となるため、殺菌剤による重要防除時期である。
3. トマトに登録のある殺菌剤 11 剤を用いたすすかび病に対する防除効果の比較では、TPN 水和剤およびマンゼブ（F）水和剤が優れている（表 3）。
4. これら 2 剤を重要防除時期に使用した防除体系は、慣行防除体系に比べすすかび病の防除効果が高く、発病を低く抑えることが可能である（図 1）。

**[成果の活用面・留意点]**

1. トマト・ミニトマトの促成・抑制栽培で活用できる（三重県のトマト・ミニトマト栽培面積：72ha 普及センター調べ）。
2. 前作で多発生した場合は、定植直後に TPN 水和剤を散布する。
3. 農薬の登録内容は変更されることがあるので、使用時は、必ず使用者自身でラベルを確認する必要がある。

[具体的データ]

表1 前作と定植後初期のトマトすすかび病の発病株率

圃場	発病株率(%)と調査日			
	前作 6月25日	(定植日)	9月11日	9月30日
A	95	9/6	100	100
B	100	8/28	1	100
C	2	9/1	3	0
D	0	8/17	13	3
E	2	9/11	0	0

※各圃場 100 株調査

表2 トマトすすかび病菌接種後の発病と伝染までの気温別日数

気温	接種後日数			
	11	16	24	28
33℃		病斑形成		胞子形成せず
30℃	病斑形成	胞子形成		
28℃	胞子形成			
25℃			病斑形成	胞子形成
20℃				病斑形成せず

※品種：桃太郎コルト 第5複葉展開期に接種

表3 トマトすすかび病に対する TPN 水和剤およびマンゼブ(F)水和剤の防除効果

	希釈倍数 (倍)	発病率 (%)	発病度	防除価	薬害 (汚れ)	FRAC コード
TPN水和剤	1,000	28.2	5.6	82.5	— (±)	M3
マンゼブ (F) 水和剤	1,000	9	1.8	94.4	—	M5
無処理	—	69.8	32	—	—	—

※汚れ±: 果実にふけばとれる程度の白い汚斑が付くため、着果前の定植初期に使用する。

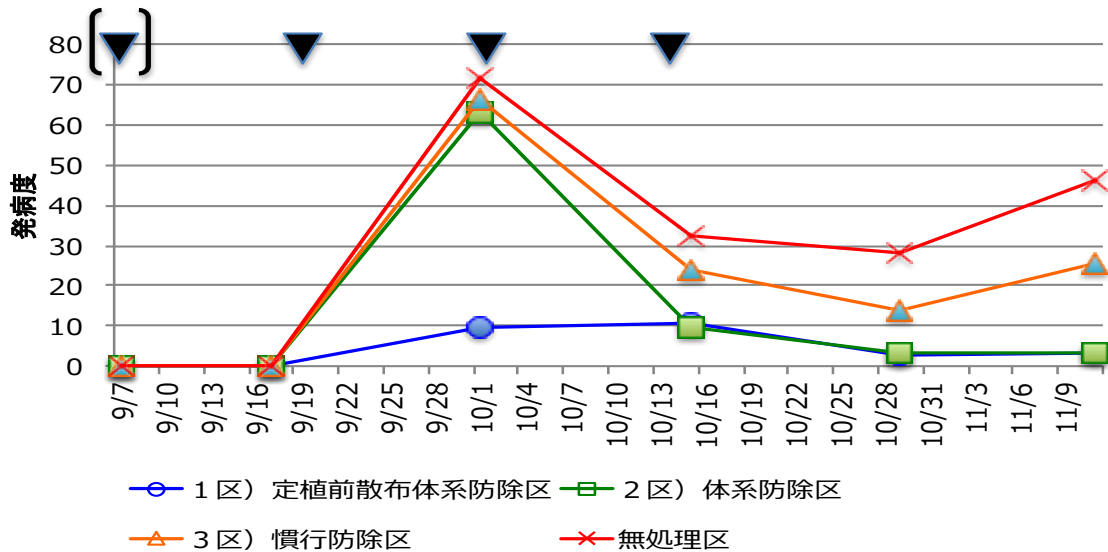


図1 防除体系の違いによるトマトすすかび病の発病度の推移

※ 9/7 定植、定植直後にハウス内の伝染源が感染したことを想定して病原菌を接種

品種：桃太郎コルト、10 株 3 反復の平均値、▼: 殺菌剤散布日、

1 区) 定植前日に TPN、9/18 に TPN、10/1・10/15 にマンゼブ F を散布

2 区) 9/18・10/1 に TPN、10/15 にマンゼブ F を散布、3 区) 2 区と同日に登録殺菌剤を散布

[その他]

(鈴木啓史)

研究課題名：発生予察事業の調査実施基準の新規手法策定事業

予算区分：執行委任（農林水産省委託プロジェクト）

研究期間：2010～2014 年度

研究担当者：鈴木啓史、辻朋子、黒田克利、田口祐美